

# 郡谷里貝塚出土の卜骨の研究

—韓国における考古民族学的研究・V—

渡 辺 誠

## 1. はじめに

短期間ずつではあるが1981年以来15回にわたって行ってきたところの、韓国における考古民族学的研究の成果は、本論集において4編、その他に2編を報告してきている。それらのリストは次の通りである。

1. 「西北九州の縄文時代漁撈文化」 『列島の文化史』 2所収 (1985年)
2. 「韓国におけるドングリ食」 『本論集』 史学32所収 (1986年)
3. 「日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源」 『本論集』 史学33所収 (1987年)
4. 「高麗瓦の製作技法について」 『本論集』 史学33所収 (1988年)
5. 「朝鮮海峡の回転式離頭話」 『日本民族・文化の生成』 1所収 (1988年)
6. 「滴水瓦の製作技法について」 『本論集』 史学36所収 (1990年)

このうち1~3・5は縄文時代、4・6は江戸時代などとの関係において調査したものである。そして本稿において報告するところの卜骨は、弥生時代において日本と韓国との関係がもっとも緊密な資料の一つである。

## 2. 郡谷里貝塚の発掘調査

卜骨を多量に出土した郡谷里貝塚は、韓国本土においてはもっとも西南端の郡である全羅南道海南部の、松旨面郡谷里に位置している(第1図、写真1)。東南から西北に突き出した標高約26mの丘陵上に住居址があり、貝塚はその周囲の斜面にA~Cの3地点が形成されている(第2図)。そして現海岸線までは水田を隔てて約2kmである。

貝層の厚さは、もっとも厚いところでは約3mにも達するが、その形成時期はほぼ初期鉄器時代(原三国時代)である(写真2)。なおその中の各文化期の実年代については、調査責任者の崔盛洛副教授の見解に従うこととする。

本貝塚の発掘調査は、主として国立木浦大学校博物館によって、3次にわたって実施されている。その調査年次は次のとおりである。

第1次：1986年10~11月

第2次：1987年9～10月

第3次：1988年10～11月

これらの報告書は、木浦大学校博物館学術叢書第8・11・15輯として刊行されている。なお第1・2次調査においては、国立光州博物館もB地点を発掘しているが、報告書は未刊行である。

筆者は第3次調査に参加させて頂き、かつ第1次の動物遺体の報告を書く機会を与えて頂き光栄であった（第3次報告書所収）。

本稿において報告するところのト骨は、木浦大学校博物館発掘によるA・C地点貝塚出土の23点であり、A地点21点、C地点2点である。今後自然遺物の精査が進むと若干増加する可能性があるらしい。また国立光州博物館発掘資料も同数近くあり、全体としては数10点に達すると推定されるが、韓国内ばかりでなく日本をも含めて、1遺跡においてこのように多量のト骨を出土した遺跡はきわめて稀なことである。後に記すように、韓国では5遺跡より8点、日本では34遺跡より155点出土しているが、1遺跡において多量のト骨を出土したのは、神奈川県横須賀市染屋遺跡（奈良～平安時代）の41点、同県三浦市間口洞窟（弥生時代後期）の18点、そして奈良県田原本町唐古鍵遺跡（弥生時代後期？）の11点であり、その他はすべて10点以下である。（神沢1987a）。

### 3. 郡谷里貝塚出土ト骨の検討

郡谷貝塚出土ト骨23点のリストは、第1表に示すとおりである。この表ではまず各年次の報告書の記載に従って示すことにする。

それらの素材はシカ類とイノシシの肩甲骨であり、不明の2点もそれらのいずれかの細片であろう。また両者の比率は総数においては2対1でありシカ類が多い。しかしそれらの時期別変遷をみてみると、はじめのⅡ期においてはその比率は逆転していて、イノシシが3倍を占めている。そしてⅢ期でシカ類が多くなり、Ⅳ・V期ではシカ類のみになる（第3図）。なお最古期のⅠ期には貝層が形成されていないため、ト骨をはじめ骨角製品はほとんど出土していない。

一方時期別の頻度数による哺乳類の変遷をみてみると、Ⅳ・V期にかけてシカ類が増加し、イノシシがやや減少する傾向が認められ興味深い（第4図）。しかし狩猟対象動物の変遷のみを、ト骨の素材変遷の原因にすることには慎重さが必要である。

形態学的にみても、シカ類の肩甲骨はイノシシのそれとはやや異なる点があるらしく、調整のための加工痕が顕著である。それらの検討に当たって肩甲骨の各部位名を記せば、次のとおりである（第5図）。

肩甲骨の身体の内側に面する肋骨面の肩甲下窓はやや平坦であり、その側縁が肥厚している。

一方身体の外側に面する背側面には肩甲棘が走っている。そしてこれはシカ類とイノシシとでは異なり、断面図に明らかのようにイノシシでは直角に近いが、シカ類では大きく曲がっている。実測図および図版では、背側面をA、肋骨面をBとして示す。

次に加工痕の検討結果は第3表に示すとおりである。シカ類とイノシシとでもっとも異なる点は、シカ類では大多数が肋骨面（肩甲下窓）を削って整形しているのに対し、イノシシの場合はまったく削っていない。シカ類では14例中3例のみにはこれがみられないが、それらはいずれも若い個体であり、小型であるうえに関節面の剥がれでいる例もある（No.6）。

やや膨らんだ側縁は、シカ類では若い個体を除きすべて肋骨面とともに削られている。そしてイノシシの場合も半数が整形されている。逆に肩甲窓のカットはイノシシの方が多い。若い個体を除いた検討可能な例でみれば、イノシシ5例はすべて、シカ類は2例にのみみられ、3例にはみられない。これは作業の時に大きく曲がった肩甲窓が、その妨げになつていていないことを示唆しているとみられ興味深い。

次に鑽灼の形式について検討すると、多くの場合肋骨面に直接的に灼を加えている。確認できる17例中疑問の残る2例以外はすべてこの形式である。2例はともにシカ類でNo.1と16（写真3・6・11）であり、鑽を行っている可能性があり、さらによく検討を加えたいと考えている。

また鑽灼を連続的に加える方向は、関節面を上にして肩甲窓と平行する方向をタテとし（写真11上5），これを直交する方向をヨコとすれば（同下），8対3でタテ方向が多い。

次にこれらの資料と日本の資料との比較検討を行う前に、朝鮮半島における従来の出土例との検討を行うことにする。

#### 4. 朝鮮半島におけるト骨

従来次の4遺跡から出土しており、本遺跡は5番目に相当する（第4表）。

- |                          |      |
|--------------------------|------|
| 1. 咸鏡北海茂山邑虎谷遺跡（黄基德1975他） | 4点以上 |
| 2. 釜山市影島区朝島貝塚（韓炳三他1976）  | 1点   |
| 3. 金海市府院洞貝塚（沈奉謹1981）     | 3点   |
| 4. 金海市鳳凰洞貝塚（沈奉謹1987）     | 1点   |

1は朝鮮半島東北部の咸鏡北道、他は東南部の慶尚南道に位置しており、郡谷里貝塚は西南部の全羅南道に位置して中央部に空白を残すものの、ト骨の分布が全域に及んでいたことを一段と明確にしたことは重要な成果である（第14図）。

それらの所属時期は、2～4はいずれも初期鉄器時代（原三国時代）である。これらに対して虎谷のみはやや古いらしい。ここでは多数出土しているが、写真などで確認されるのは4点のみである。

第1例（写真12-1）は、『朝鮮遺跡遺物図鑑』第1巻に青銅器時代のものとして掲載されている。材質・出土状態は不明である。

第2～4例（同2～4）は、『報告書』（黄1975）において初期鉄器時代と報告されている。いずれもシカ類の肩甲骨で、2と3のいずれかは第14号住居址の床面、4は第17号住居址の炉址付近から出土している。そして第17号住居址の覆土の搅乱層からも多数出土していると記されているが、図・写真などは掲載されていない。

出土状態は、この虎谷遺跡のみ住居址内出土であるが、他の3遺跡はいずれも貝層中の出土であり、郡谷里貝塚の場合と同じである。

素材はシカ類が主で、イノシシは府院洞貝塚の1点のみである。それらの使用部位は肩甲骨が主であるが、シカ類7点中2点には角を裂いて加工したものも含まれている。しかしこれらには灼痕はみられず鑽？のみで、やや疑問が残る（第15図）。少なくとも明らかに鑽を行った例が未検出の現段階では、慎重に考えたい。

また鑽灼を連続的に加える方向は、タテ4点、ヨコ3点で、地域差もない。もっとも焼灼面の残りはよくないので、十分に観察することはできない。そのなかにあって虎谷遺跡の第4例（写真12-4）はヨコ型がよくわかり、そのうえ本貝塚No.16例ともよく似ていて興味深い。

以上例数はきわめて少ないが、しかし本貝塚の例と特に大きく異なる様子は認められない。すなわち朝鮮半島の卜骨は、全体として共通した特徴を持っているということができる。もっとも空白部分に当たる楽浪郡などに関する地域では、漢帝国で行われていた卜甲が出土する可能性があり、今後の課題である。

## 5. 弥生時代の卜骨との関係

わが国の一例には現代においてなお卜骨・卜甲の習俗を伝えているが、考古学的調査によって卜骨が出土したのは1949年のことである。神奈川県三浦市間口洞窟の弥生時代中・後期の文化層より、赤星直忠氏によってはじめて18点の卜骨が発掘されたのである。

その後の研究は神沢勇一氏によって継承発展されている。そして日本における卜骨は、弥生時代中期（BC1世紀）を上限としており、朝鮮半島より伝播したものであると結論づけられている。資料の報告は不完全で問題があるが、虎谷遺跡は青銅器時代にさかのぼる可能性が大きい。また郡谷里貝塚の各文化期の実年代を、崔盛洛氏は次のように比定している。それらは弥生時前期後半～後期にはほぼ並行している（崔他1989）。

II期 B. C. 2 C後半～1 C前半

III期 A. D. 1 C後半

IV期 A. D. 2 C初～前半

V期 A. D. 3 C前半

神沢氏は、ト骨が弥生時代前期後半（BC2世紀）までさかのほる可能性を示唆しているが、具体的には中期以降の資料のみである（神沢1990）。したがってやや古いⅡ期からⅢ期にかけての時期が、ト骨の素材がイノシシよりシカ類が多くなる時期であることに注目されてくる。そして弥生時代の場合は、シカ類が約76%，イノシシが約14%であり、圧倒的にシカ類が多い（神沢1990）。これは弥生人のシカに対する特別な観念による選択ではなく、朝鮮半島の傾向をそのまま踏襲しているとみるべきである。あるいは仮にシカに対する特別な観念を認めるとしても、その観念自体朝鮮半島より伝播したとみるべきである。

もっとも筆者は、弥生時代における文化交流は朝鮮半島東南部の慶尚南道に重点があり、西南部の全羅南道に重点が移ったのは古墳時代中期からと考えている。しかしそれで検討したように資料数は少ないが、初期鉄器時代（原三国時代）における朝鮮半島のト骨は全体として共通した特徴をもっているとみられるので、上記のような推定も可能だといえよう。

鑽灼の型式もまたきわめて類似している。

鑽灼の型式について日本の場合は、神沢勇一氏によって亀甲を用いた場合をも含めて、次のように分類されている（第16図、神沢1990）。

第Ⅰ型式：僅かに磨いただけの獸骨の片面、薄い部分を特に選び、偏円形に焼くもの。

第Ⅱ型式：骨の表面を僅かに磨き、ときに一部を薄く削ぎ、そこを点状に焼くもの。骨の両面、ときには側面も使う。

第Ⅲ型式：骨の片面を大きく削るように削り、刀子状の刃物の先端で、平面が不整円形、断面が摺鉢形に近い粗雑な鑽を掘りこむもの。鑽の内側をギザギザのまま焼くのが特徴。

第Ⅳ型式：骨面を磨くか、粗く切り削って面を僅かに調整したのち、平面が直径5ミリ前後、断面が半円形の整った鑽を掘りこむもの。

第Ⅴ型式：整形した獸骨・亀甲の片面に、縦4ミリ、横6ミリ前後の横位の長方形に鑽を掘り、鑽の内側底面を十字形に灼くもの。

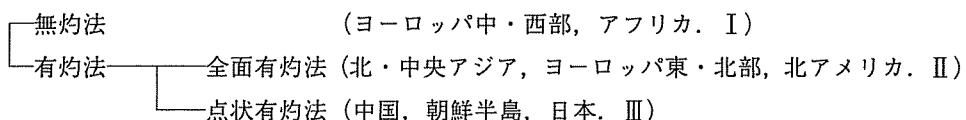
これらの新旧順序は、編年学的に第Ⅱ型式→第Ⅲ型式→第Ⅴ型式であり、弥生時代のト骨はすべて第Ⅱ型式である。また第Ⅲ型式は古墳時代前期にのみみられ、第Ⅴ型式はト甲に伴って古墳時代後期に伝播したものである。そして例数の少ない第Ⅰ型式は第Ⅲ型式に伴出し、第Ⅳ型式は第Ⅲ型式と第Ⅴ型式との間に位置している。

郡谷里貝塚をはじめとして朝鮮半島のト骨は大部分この第Ⅱ型式に相当し、技術的にもその系統上に位置していることは明らかである。なお検討の余地のある郡谷里貝塚の2点は第Ⅳ型式に相当する可能性を含んでいることになる。

また弥生時代などのト骨はト占終了後明らかに人為的に打ち碎かれ、特別の埋め方をせず貝塚などに捨てられているというが、朝鮮半島の場合も貝塚と住居址の出土例ばかりで特別扱いはされておらず、シカ類の多いこととともに注目すべき共通点とみなされる。

以上の諸点を総合すれば、わが国の卜骨は弥生時代中期に朝鮮半島より、おそらく直接的には朝鮮半島東南部の慶尚南道から伝えられたものであろう。しかしこの地域の資料は少なく、郡谷里貝塚に特徴的であったシカ類肩甲骨の加工痕は確認されていない。ただし弥生時代の資料には類例がみられ、中間の慶尚南道の資料の増加が必要である。

このような点状焼灼の骨卜の方法が、中国で発達して周辺に伝播したものであることは、考古学的に明らかなことである。また民族学的資料をも加えて世界的にそれらを検討した新田栄治氏は、骨卜の方法とそれらの分布域を次のように記している（第17図、新田1977）。



中国の新石器時代後期に出現した骨卜は、殷代には国家的な卜占として発達して民間の骨卜と並存し、現代にもその名残を伝えている。素材としての亀甲の使用は、主に後者と結びついて発達したものであり、古墳時代後期に伝播する亀卜についても、その伝播については若干卜骨とは異なる観点が必要であろう。

## 6. 今後の課題

最後に若干今後の検討課題について整理しておきたい。

まず第1に、虎谷遺跡などのような資料を再報告して、基礎資料の整備をはかる必要がある。同時に類例の増加をも期待したい。特に楽浪郡関係遺跡や慶尚南道地域の資料は、わが国との関係においてもっとも鶴首されるものである。

第2は、朝鮮半島への伝播の様子を明らかにするために、上限を確認するとともに、関連する時期の中国における卜骨・卜甲の分布を知る必要がある。中国における研究は殷代の甲骨文字を伴う卜骨・卜甲の研究こそ本命であるが、周辺地域ではさらに新しい時期もきわめて重要なである。

第3は、わが国における上限を明らかにすることである。すでに明らかになりつつあることではあるが、初期稻作とは無関係に、それよりかなり遅れて伝播してきているらしい。

これら以外にも多くの問題点があることは、神沢勇一氏が整理しているところである（神沢1990）。そもそも本稿は同氏の御示唆に基づいて、わが国の卜骨の直接的な伝播地域を明らかにすることに主たる目的があったのであり、今後は両国の卜骨の比較研究がさらに重要な検討課題になってくるであろう。

### 謝 辞

本稿をまとめるに際しては、多くの方々の御指導と御協力を仰いだ。末尾ながらそれらの方々の御

名前を明記して、深謝の意を表する次第である（敬称略）。

神沢勇一（神奈川県立博物館）、妻鐘茂（木浦大学校総長）、崔盛洛（木浦大学校副教授）、熊海堂（名古屋大学大学院後期課程学生）、金健洙（名古屋大学研究生）。

#### 引用文献目録

- 崔盛洛、1987：海南郡谷里貝塚・I。木浦大学博物館学術叢書. 8。木浦。
- 、1988：海南郡谷里貝塚・II。木浦大学博物館学術叢書. 11。木浦。
- ・他、1989：海南郡谷里貝塚・III。木浦大学博物館学術叢書. 15。木浦。
- 黄基德、1975：茂山虎谷遺跡発掘報告。考古民俗論文集, 6. 124～226頁。平壤。
- 韓炳三・他、1976：朝島貝塚。国立博物館古跡調査報告. 9。ソウル。
- 沈奉謹、1981：金海府院洞遺跡。東亜大学校博物館古跡調査報告. 5。釜山。
- 、1987：金海・鳳凰洞出土の卜骨の新例。東アジアの考古と歴史, 上. 402～409頁。福岡。
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会、1988：朝鮮遺跡遺物図鑑. 1。平壤。
- 神沢勇一、1976：弥生時代、古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について。駿台史学, 38. 1～25頁。東京。
- 、1987 a：日本の卜骨。考古学ジャーナル, 281. 4～9頁。東京。
- 、1987 b：卜骨。弥生文化の研究, 8. 66～70頁。東京。
- 、1990：呪術の世界—骨卜のまつりー。弥生人とまつり. 68～107頁。六興出版・東京。
- 新田栄治、1977：日本出土骨卜への視角。古代文化, 29-12. 27～42頁。京都。

第1表 発掘年次別ト骨リスト  
(図版番号は各年次の発掘報告書における番号を指す)

番号	発掘年次	図版番号	ピット	層位	時期	種名	部位
1	I	42-1	B <sub>2</sub>	8	III	シカ	r
2	I	42-2	B <sub>2</sub>	8	III	シカ	r
3	I	43-1	B <sub>2</sub>	8	III	イノシシ	r
4	I	43-2	C	7	IV	シカ	r
5	I	43-3	B <sub>2</sub>	8	III	シカ	1
6	I	44-1	B <sub>2</sub>	8	III	イノシシ	r
7	I	44-2	B <sub>2</sub>	8	III	イノシシ	1
8	I	44-3	B <sub>2</sub>	8	III	?	?
9	I	追加	B <sub>2</sub>	8	III	シカ	r
10	II	26-1	A <sub>4</sub>	11	II	イノシシ	r
11	II	26-2	A <sub>4</sub>	11	II	イノシシ	1
12	II	26-3	A <sub>4</sub>	11	II	シカ	r
13	II	26-4	A <sub>3</sub> -A <sub>4</sub> 壁	11	II	イノシシ	r
14	III	20-1	C <sub>2</sub>	5	IV	シカ	r
15	III	20-2	C <sub>2</sub>	8	III	シカ	r
16	III	20-3	C <sub>2</sub>	7	IV	シカ	1
17	III	21-1	C <sub>2</sub>	8	III	イノシシ	r
18	III	21-2	C <sub>3</sub>	4	V	シカ	1
19	III	21-3	C <sub>3</sub>	7	IV	シカ	1
20	III	21-4	C <sub>2</sub>	8	III	シカ	r
21	III	21-5	C <sub>3</sub>	8	III	シカ	1
22	III	28-2	A <sub>1</sub>	1	V	?	?
23	III	28-3	C <sub>1</sub>	3	V	シカ	r

第2表 素材の時期別変遷 (カッコ内は%)

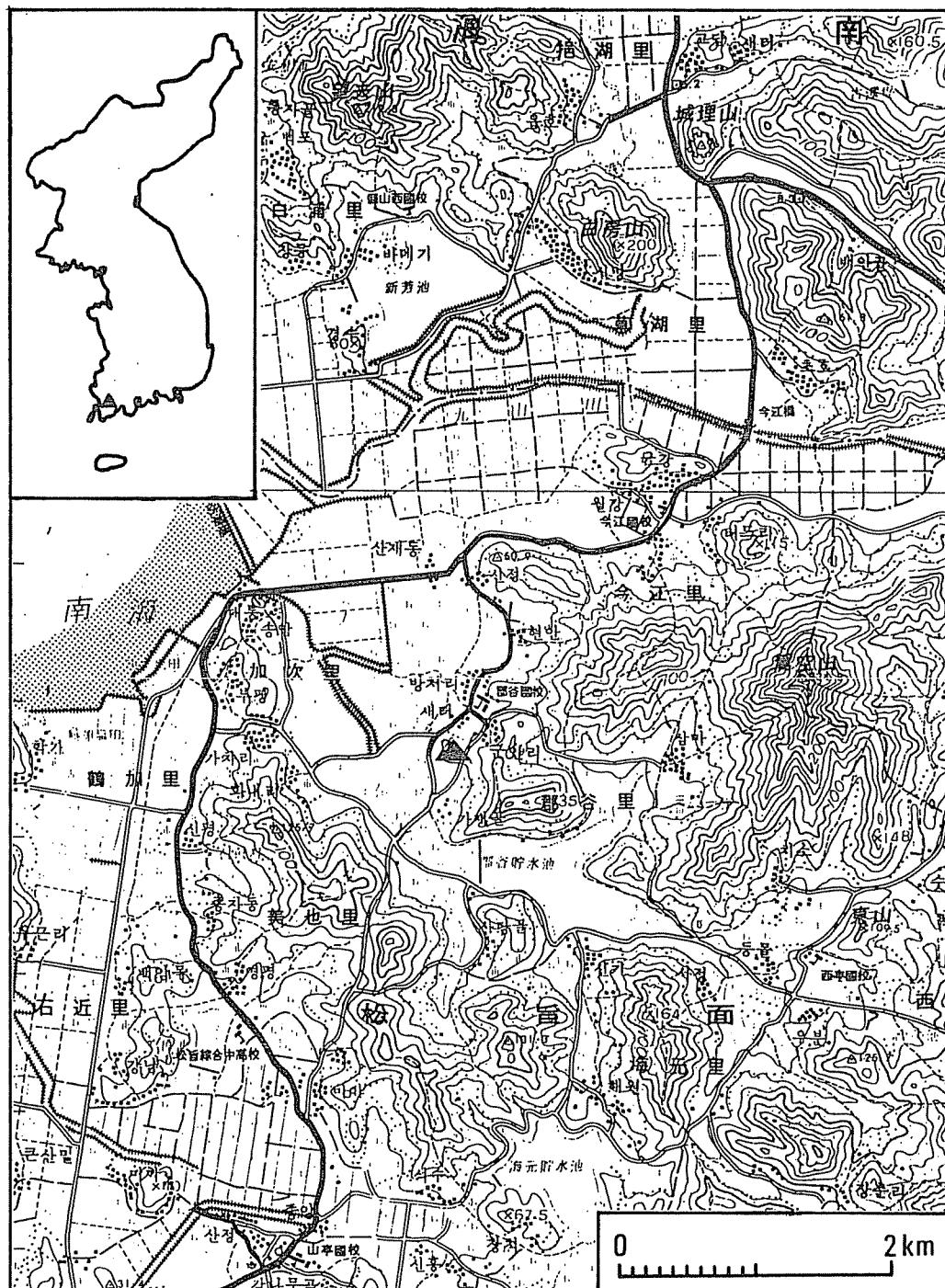
絶対年代	時期	シカ	イノシシ	?	計
B.C.2C後半～1C前半	II	1 (25.0)	3 (75.0)	0	4 (100.0)
A.D.1C後半	III	7 (58.3)	4 (33.3)	1 (8.3)	12 (99.3)
A.D.2C初頭～前半	IV	4 (100.0)	0	0	4 (100.0)
A.D.3C前半	V	2 (66.7)	0	1 (33.3)	23 (100.0)
	計	14 (60.9)	7 (30.4)	2 (8.7)	23 (100.0)

第3表 ト骨素材の調整と鑽灼痕 (番号は第1表に同じ)

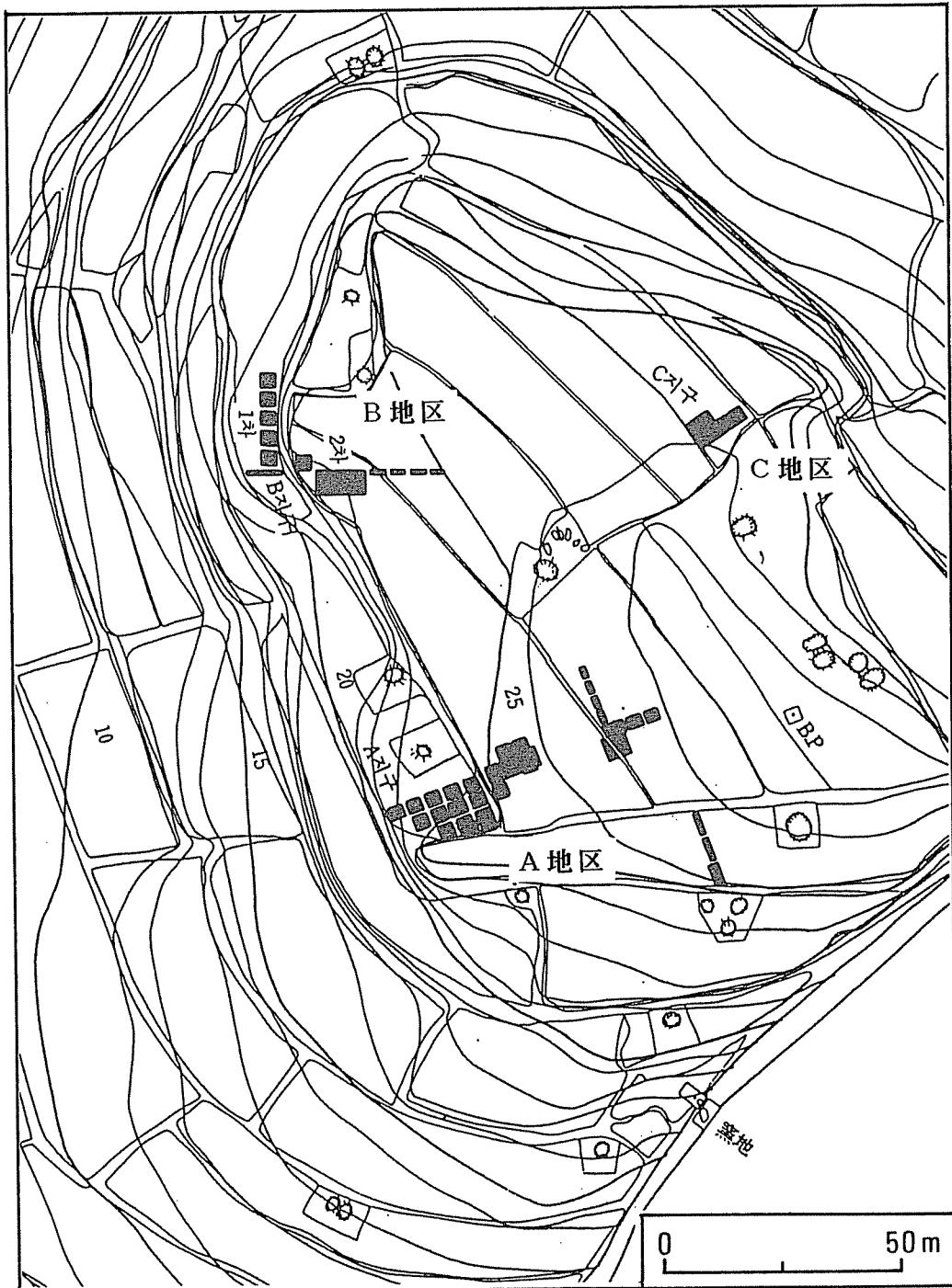
番号	時期	種名	部位	肋骨面(内)		背側面(外) 肩甲棘	鑽 灼	方向	挿図 番号	写真 番号	
				肩甲下窓	側縁						
12	II	シカ	r	○	○	?	×	内	タテ	6	3
1	III	シカ	r	×	×	×	○?	内	ヨコ	6	3
2	III	シカ	r	○	○	×	×	内	タテ	7	4
5	III	シカ	1	○	○	?	×	内	?	6	3
9	III	シカ	r	○	○	?	?	?	?	—	6
15	III	シカ	r	○	○	?	?	内	?	7	4
20	III	シカ	r	×	○	?	?	?	?	7	4
21	III	シカ	1	○	○	?	×	内	?	8	5
4	IV	シカ	r	×	×	×	×	内	?	8	5
14	IV	シカ	r	○	○	○	?	内	?	8	5
16	IV	シカ	1	○	○	×	○?	内	ヨコ	9	6・11
19	IV	シカ	1	○	○	×	×	内	?	10	7
18	V	シカ	1	○	○	○	×	内	タテ	10	7
23	V	シカ	r	○	○	?	×	内	タテ	9	6
10	II	イノシシ	r	×	○	○	×	内	タテ	11	8・11
11	II	イノシシ	1	×	○	○	×	内	タテ	11	8
13	II	イノシシ	r	×	?	?	?	内	?	12	9
3	III	イノシシ	r	×	×	○	×	内	ヨコ	12	9
6	III	イノシシ	r	×	×	○	?	?	?	12	9
7	III	イノシシ	1	×	×	?	×	内	タテ	11	8
17	III	イノシシ	r	×	○	○	×	内	タテ	13	10
8	III	?	?	×	?	?	×	?	?	13	10
22	V	?	?	?	?	?	×	?	?	13	10

第4表 朝鮮半島出土のト骨リスト(郡谷里貝塚例を除く)

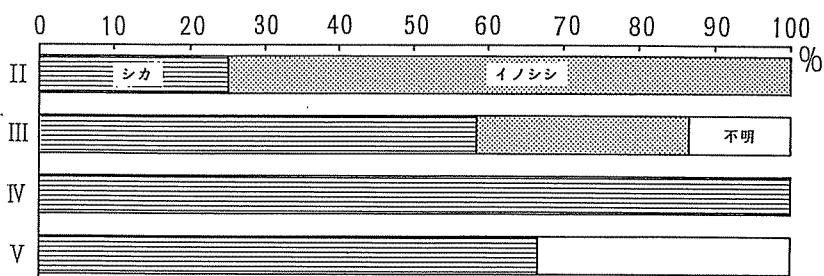
遺跡名	種名	部位	鑽 灼	方向	挿図 番号	写真 番号
虎谷1	?	肩甲骨	×	×	タテ	12-1
2	シカ	肩甲骨 r	?	?	ヨコ	同2
3	シカ	肩甲骨 r	?	?	タテ	同3
4	シカ	肩甲骨 r	?	?	タテ	同4
朝島	シカ	角	○	無	ヨコ	14-1
府院洞1	イノシシ	肩甲骨 r	?	内	?	14-2
2	シカ	角	○	無	ヨコ	14-3
3	シカ	肩甲骨 r	×	内	タテ	14-4
鳳凰洞	シカ	肩甲骨 1	×	内	タテ	14-5



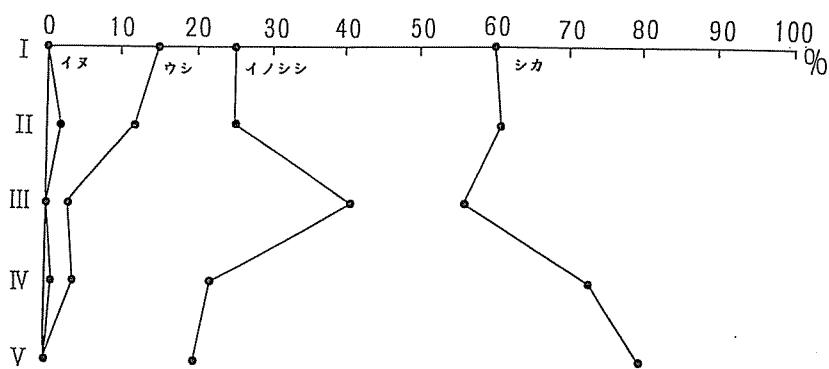
第1図 郡谷里貝塚の位置（▲印、報告書より）



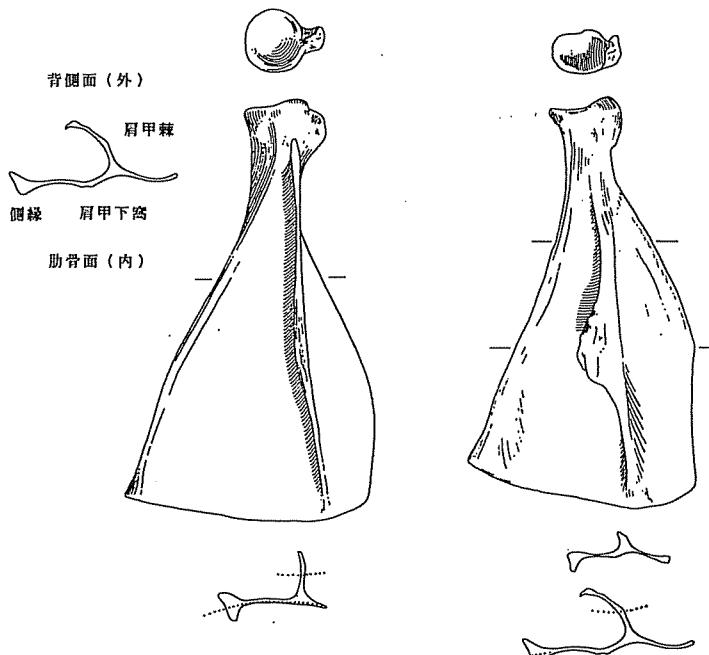
第2図 郡谷里貝塚地形図（報告書より）



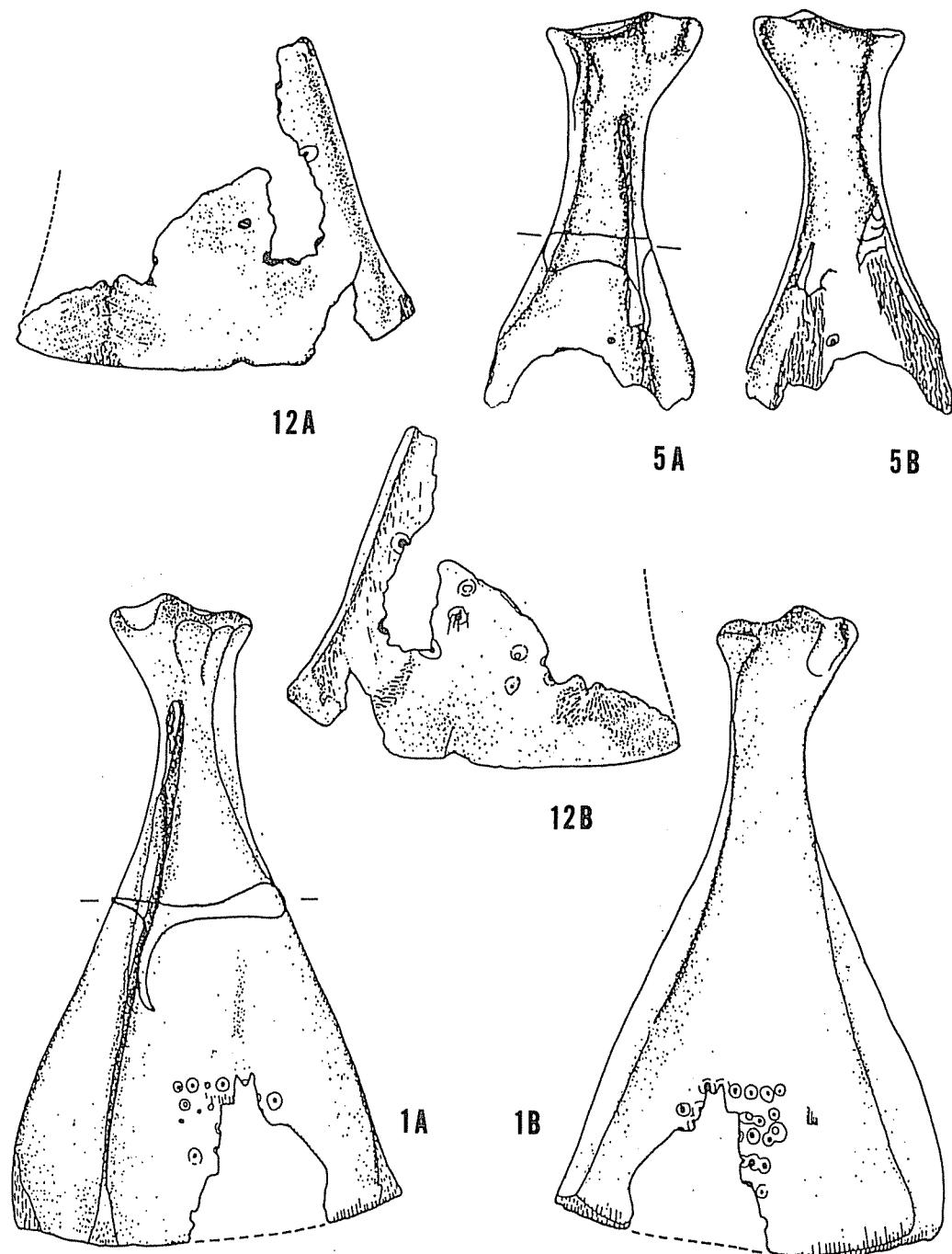
第3図 ト骨素材の時期別変遷



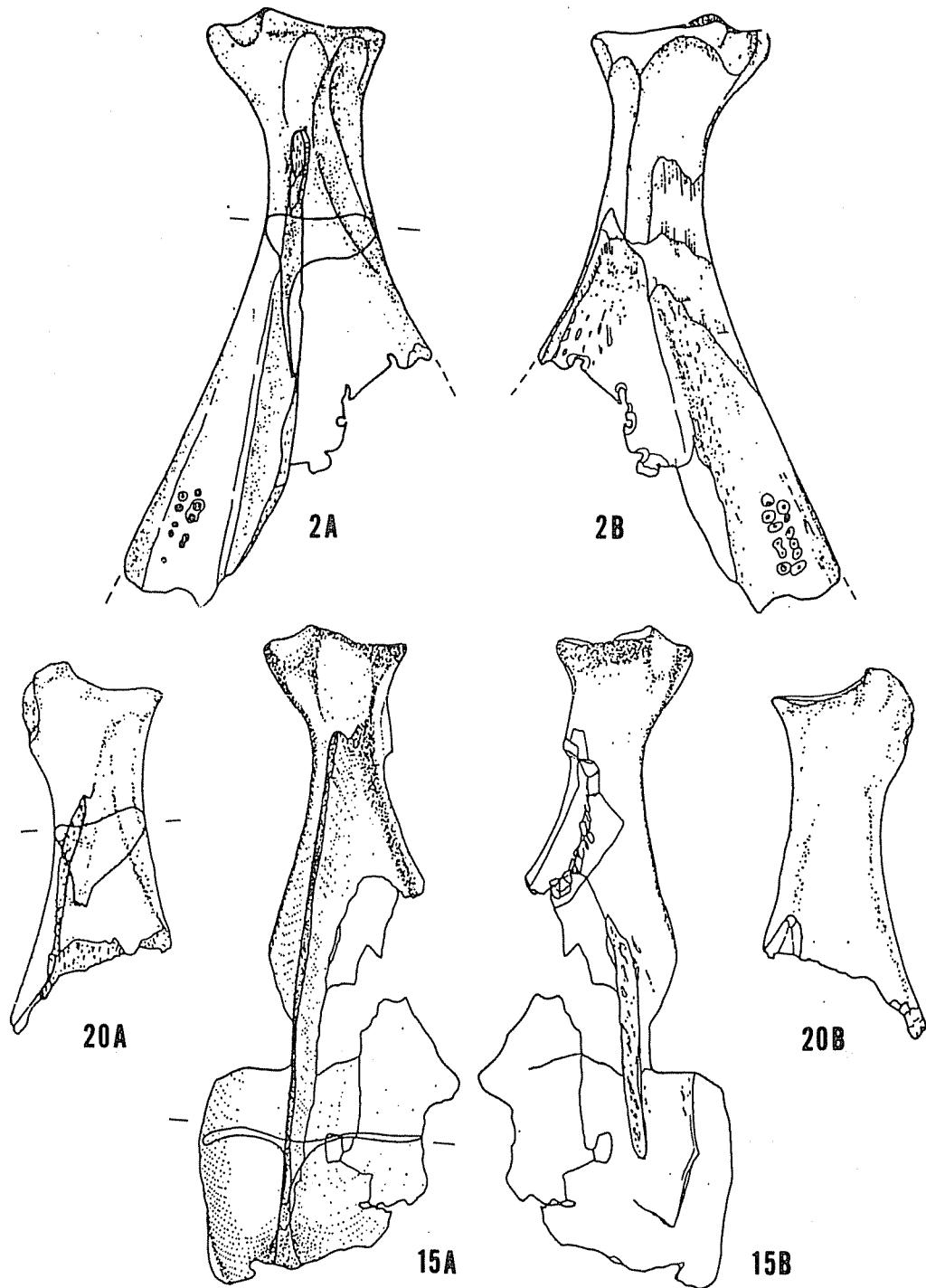
第4図 哺乳類構成比の時期別変遷



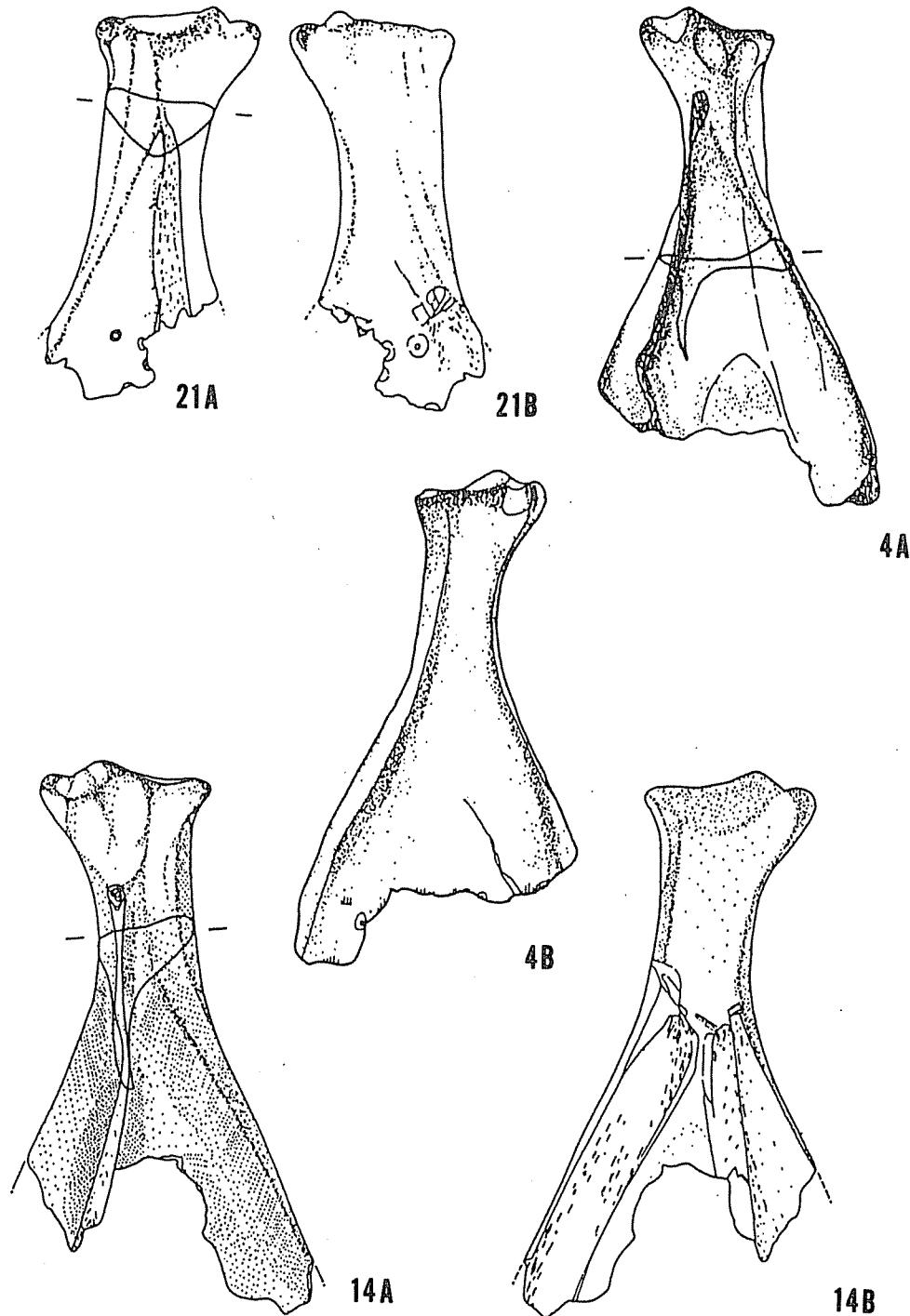
第5図 肩甲骨左背側面（左：シカ，右：イノシシ。点線はカッティングライン）



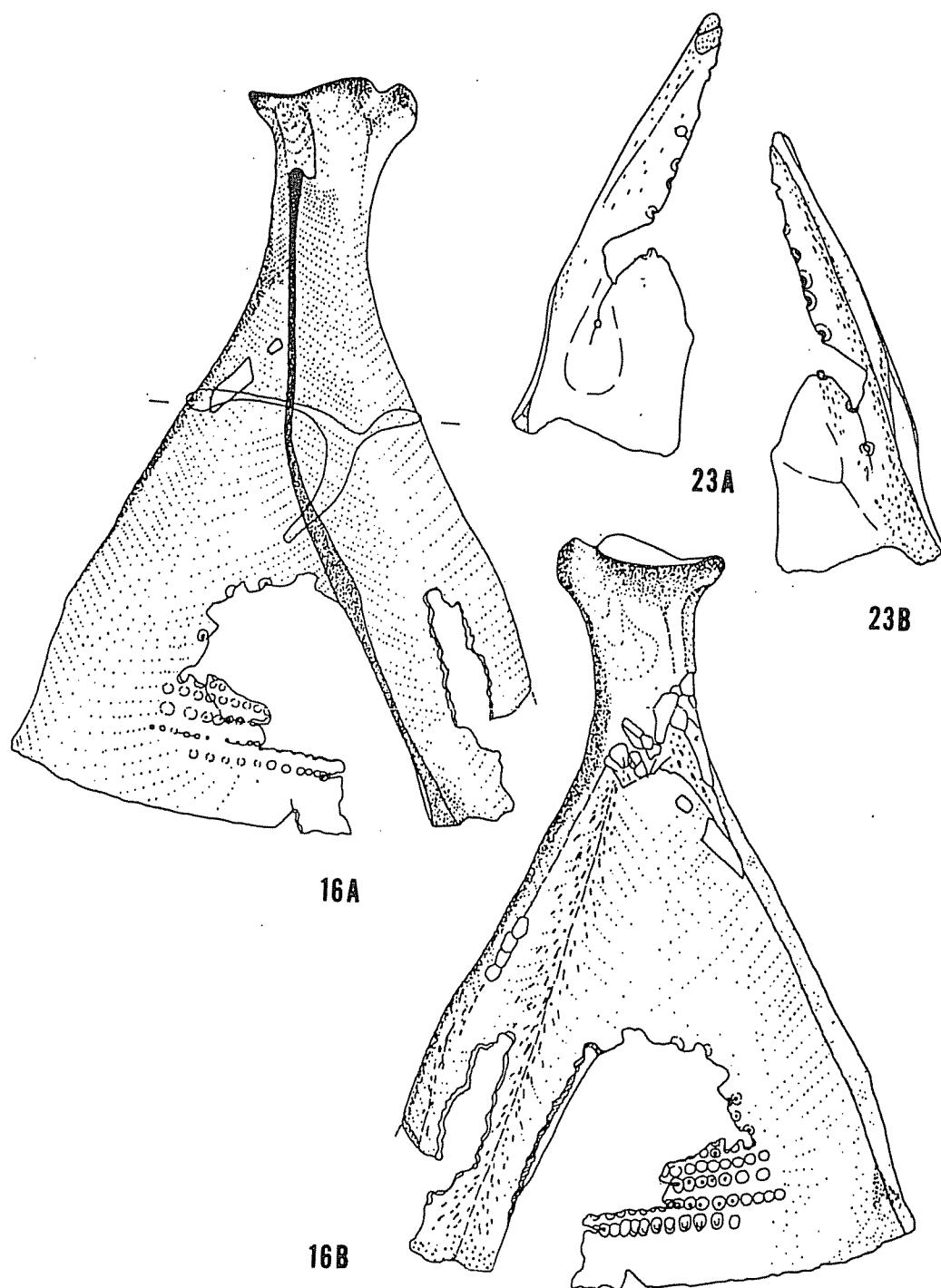
第6図 ト骨実測図1 (縮尺2分の1. 番号は第1・3表と同じ. Aは背側面, Bは助骨面.  
報告書より引用, 以下同じ)



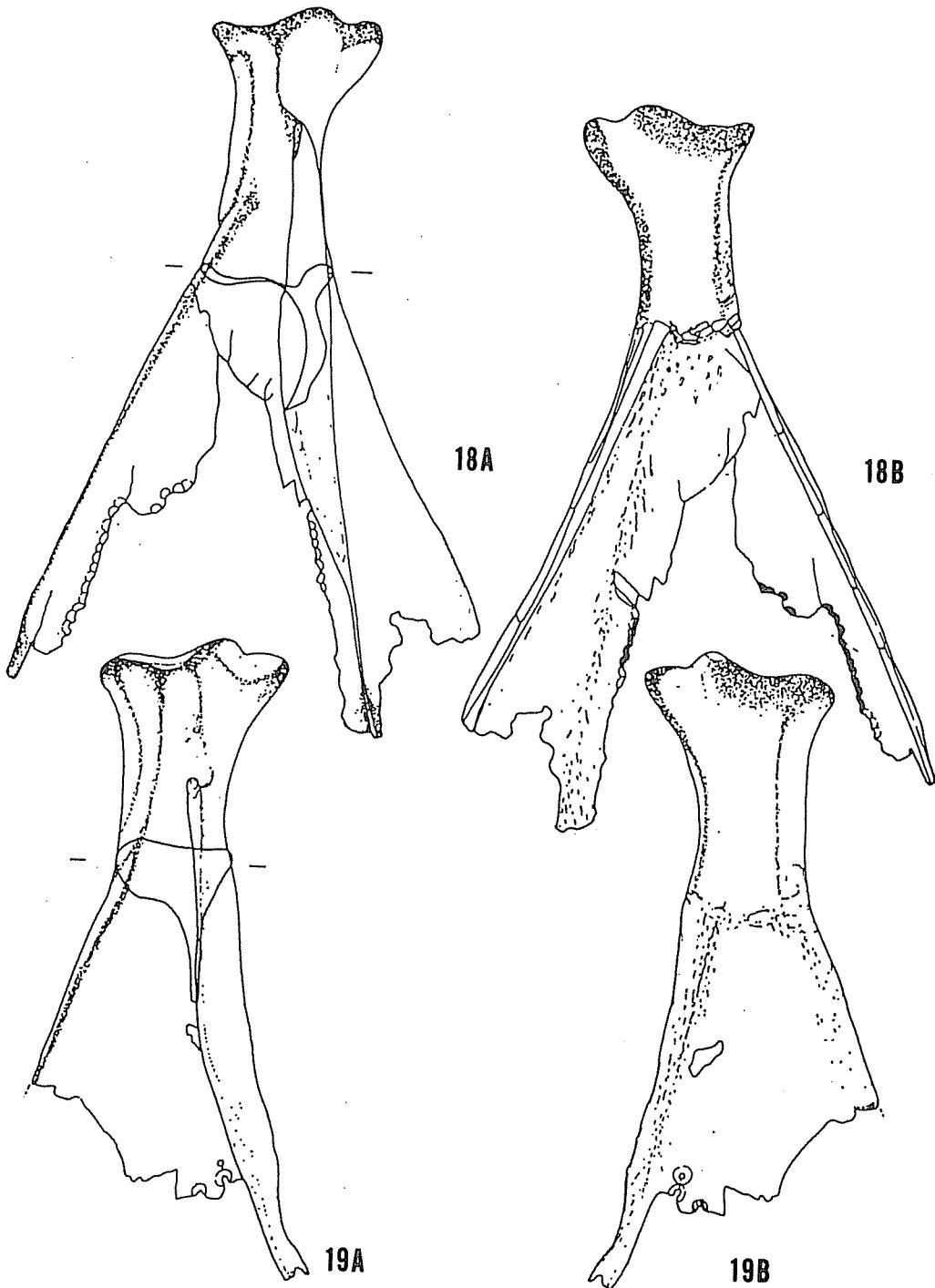
第7図 ト骨実測図2



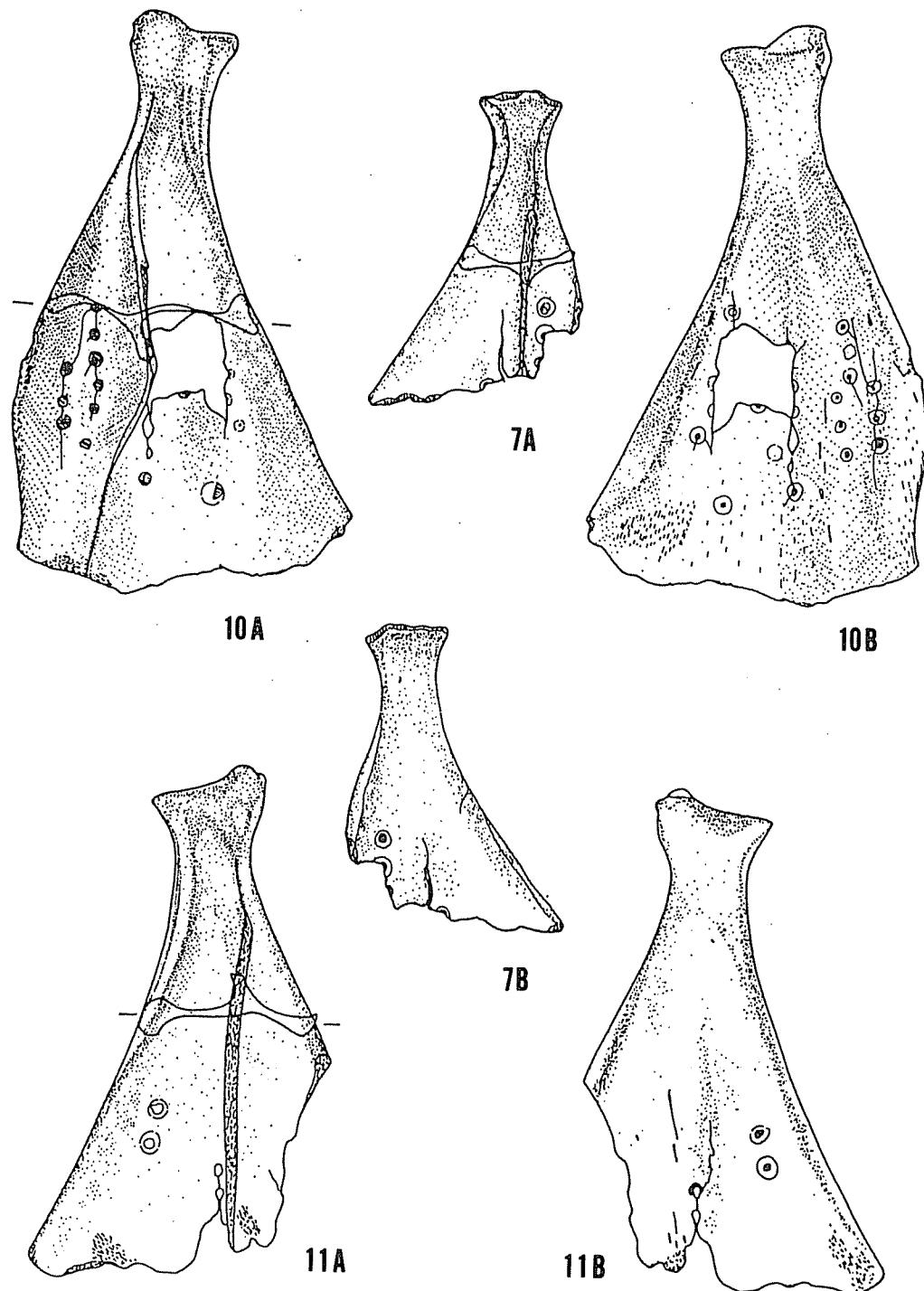
第8図 卜骨実測図3



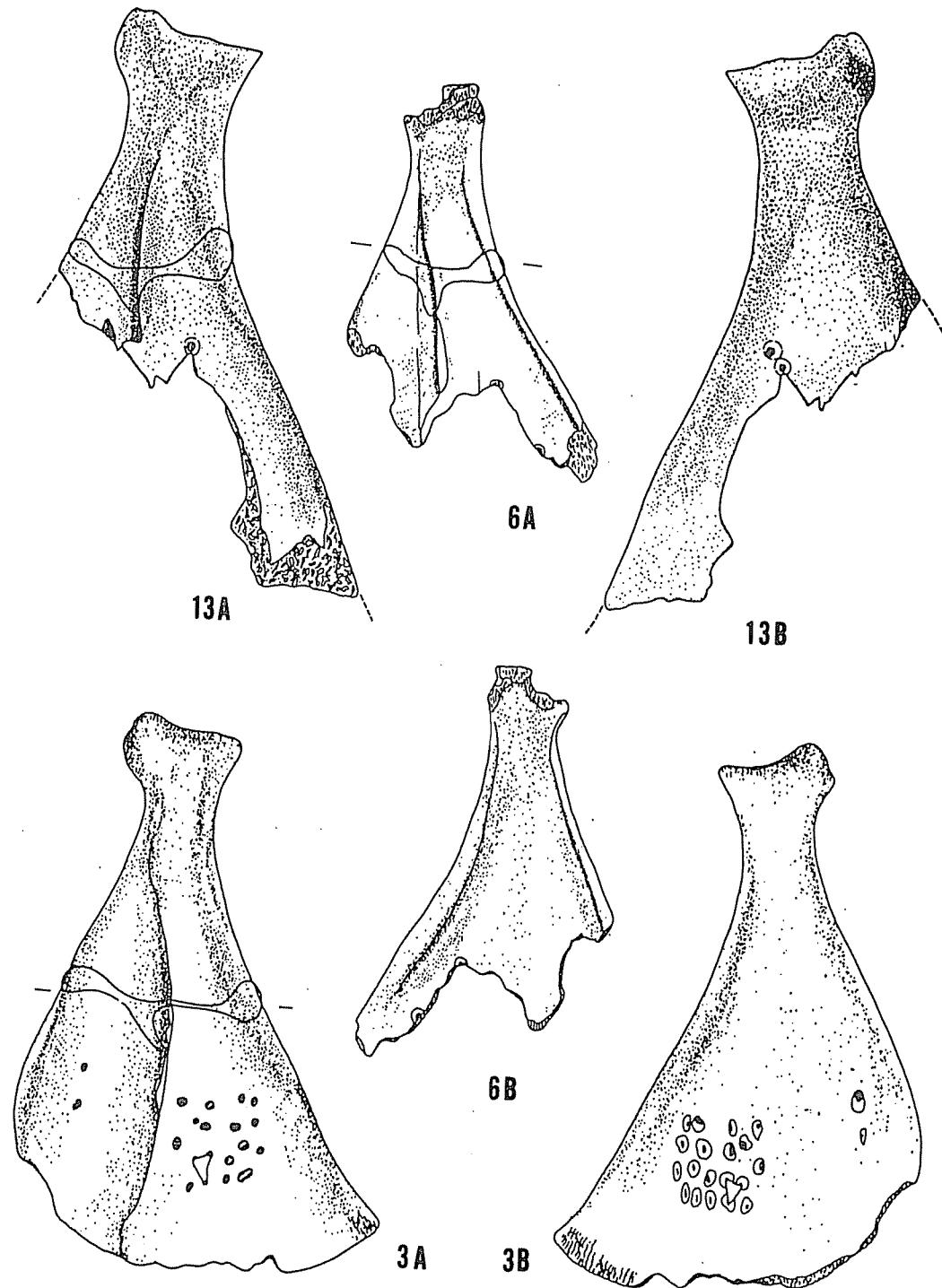
第9図 下顎骨実測図4



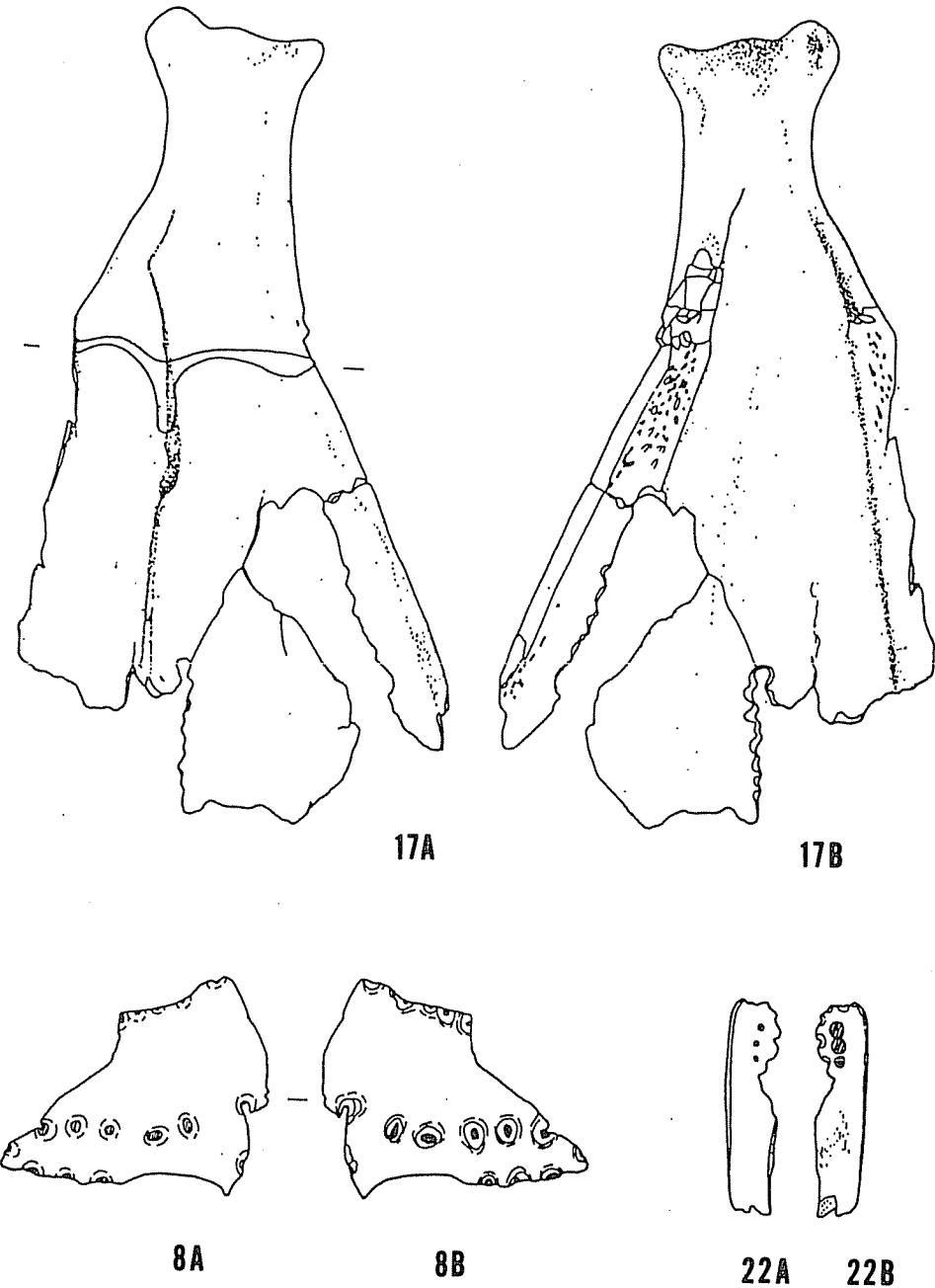
第10図 卜骨実測図 5



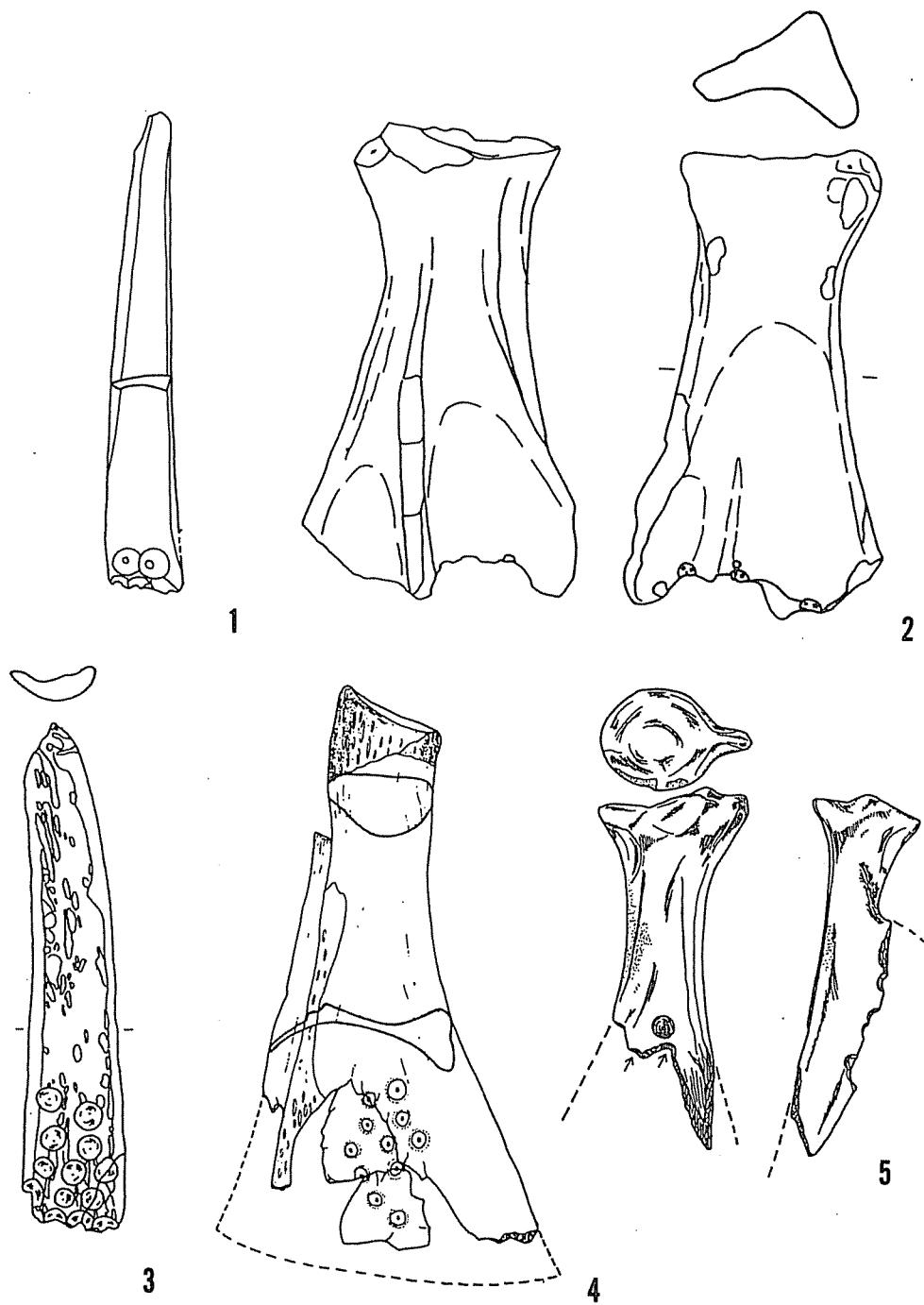
第11図 ト骨実測図 6



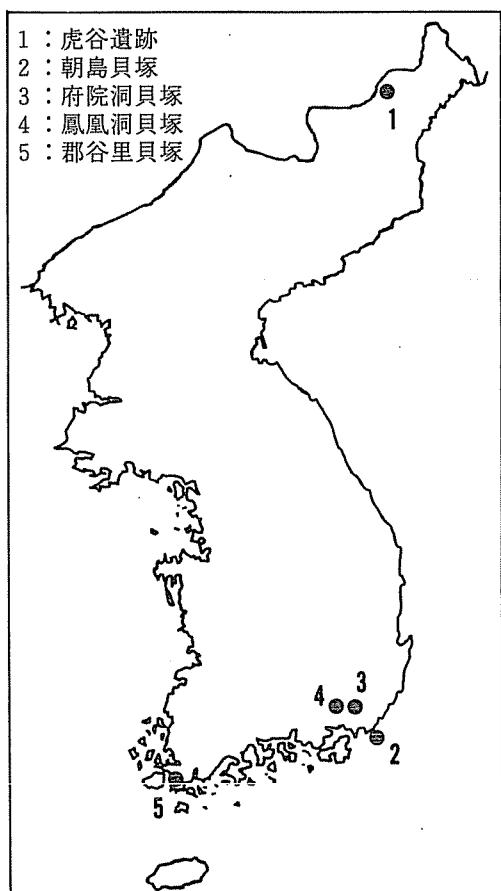
第12図 ト骨実測図 7



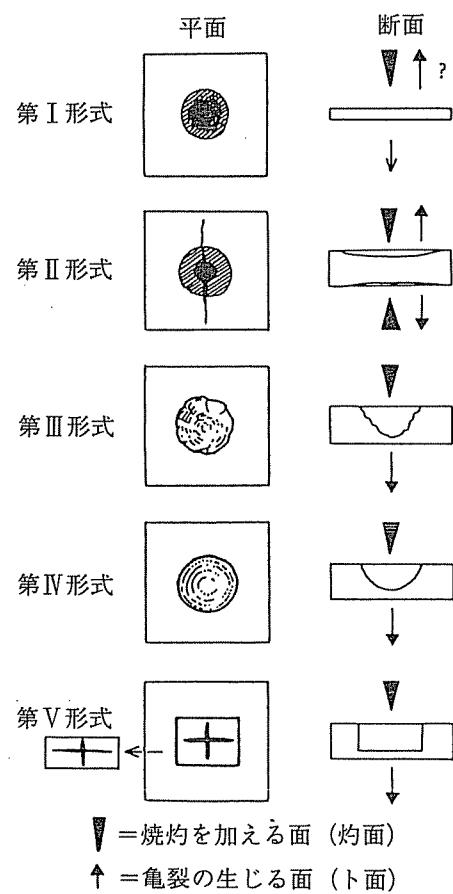
第13図 卜骨実測図 8



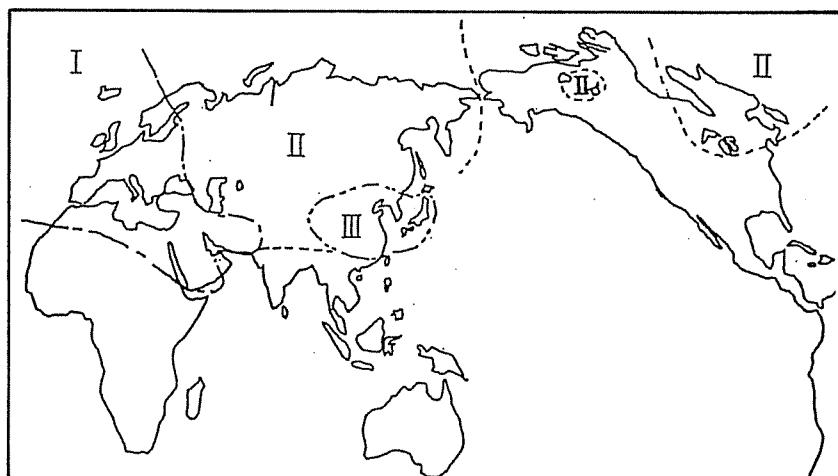
第14図 朝鮮半島出土ト骨実測図 (1:朝島, 2~4:府院洞, 5:鳳凰洞. 縮尺2分の1.  
各報告書より)



第15図 朝鮮半島におけるト骨出土遺跡分布図



第16図 燃灼形式模式図 (神沢1990より引用)



第17図 骨ト法の分布概念図 (I : 無焼法, II : 全面有焼法, III : 点状有焼法. 新田1977より)



写真1 郡谷里貝塚遠景（北より）

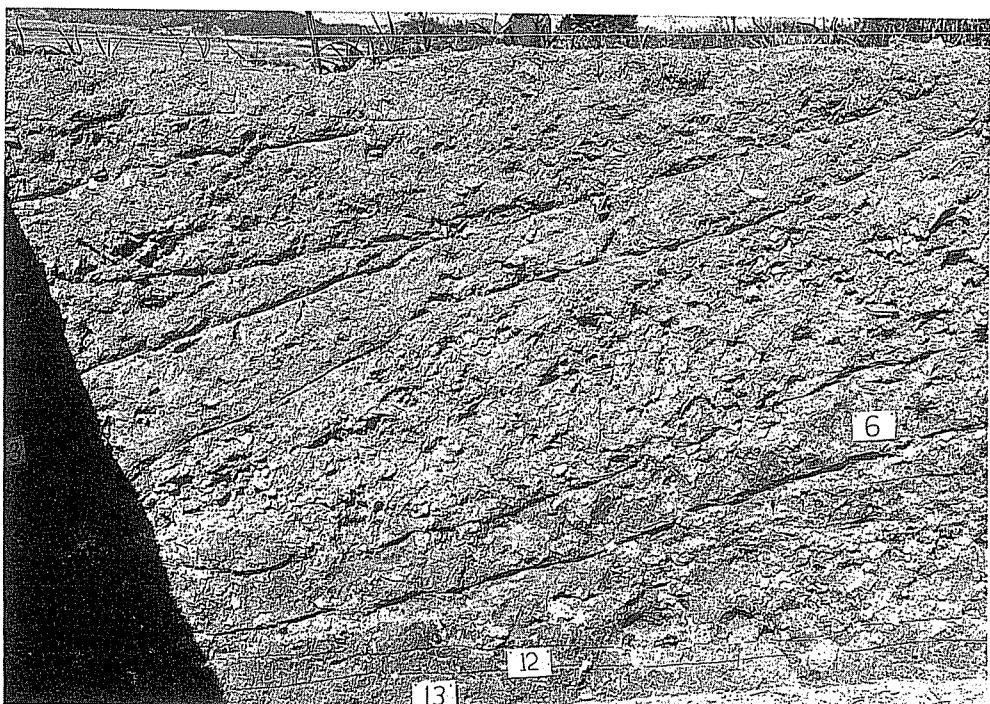


写真2 貝層の断面

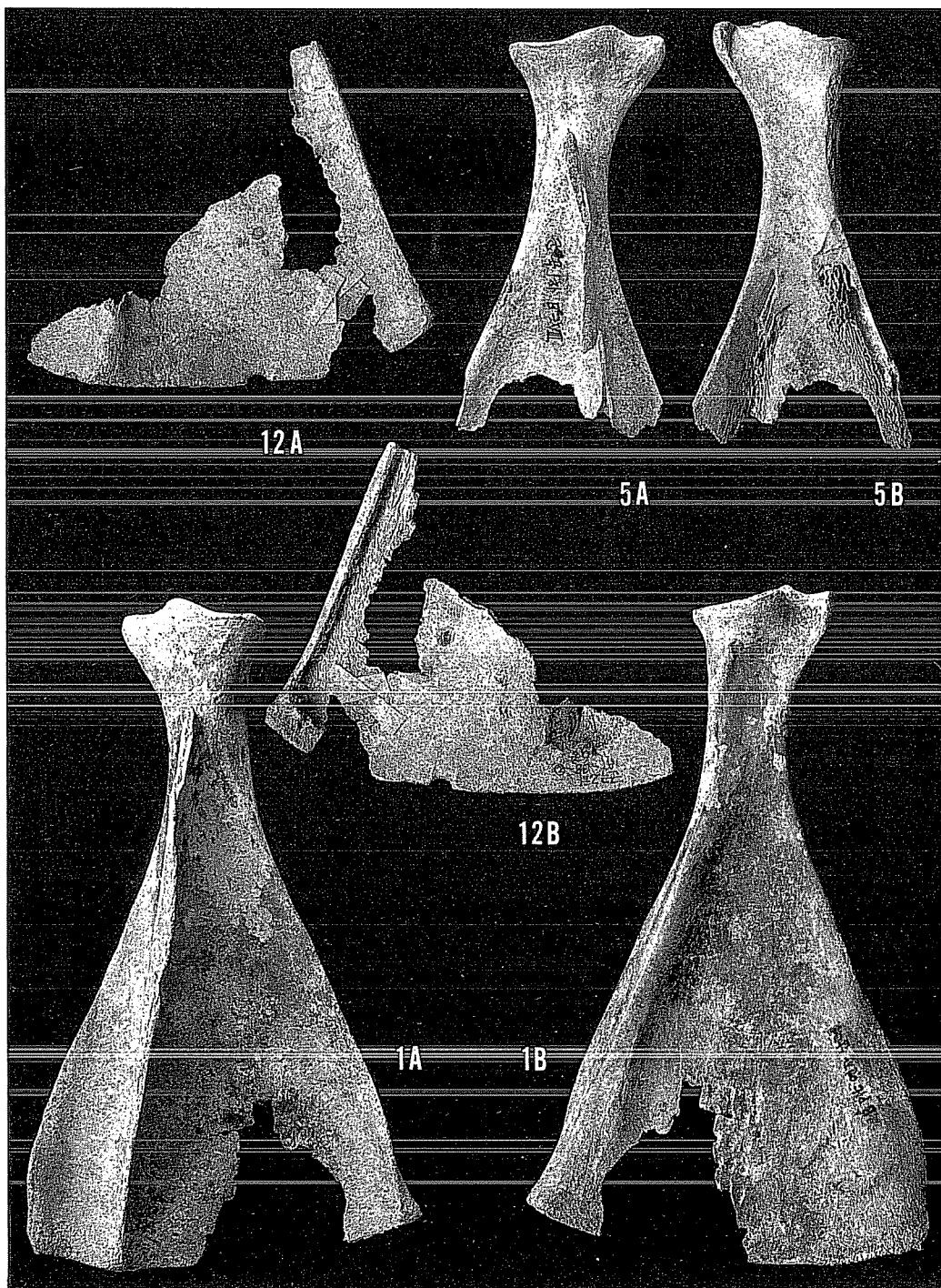


写真3 ト骨1（縮尺2分の1。番号は第1・3表に同じ。以下同じ）

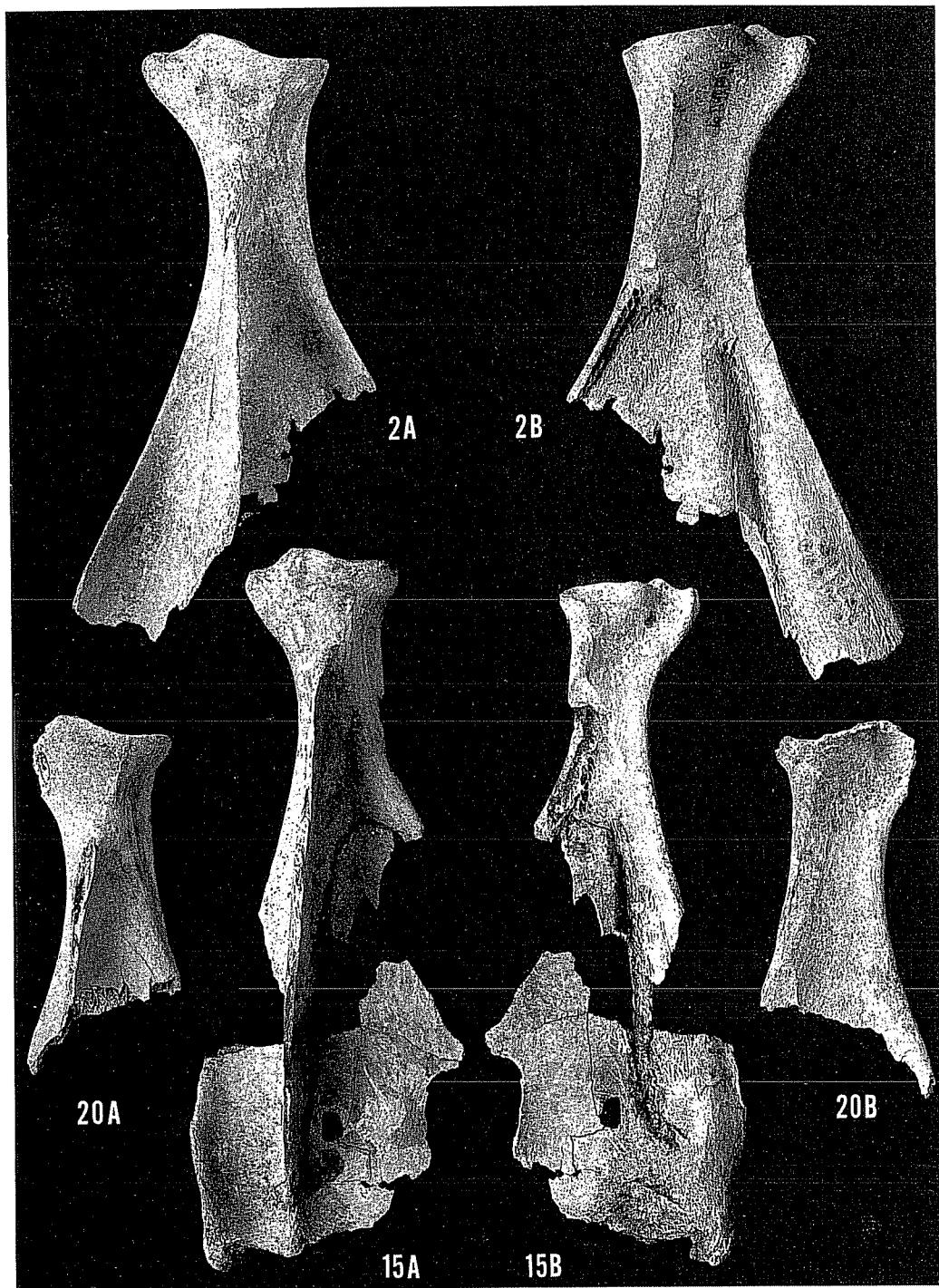


写真4 卜骨2

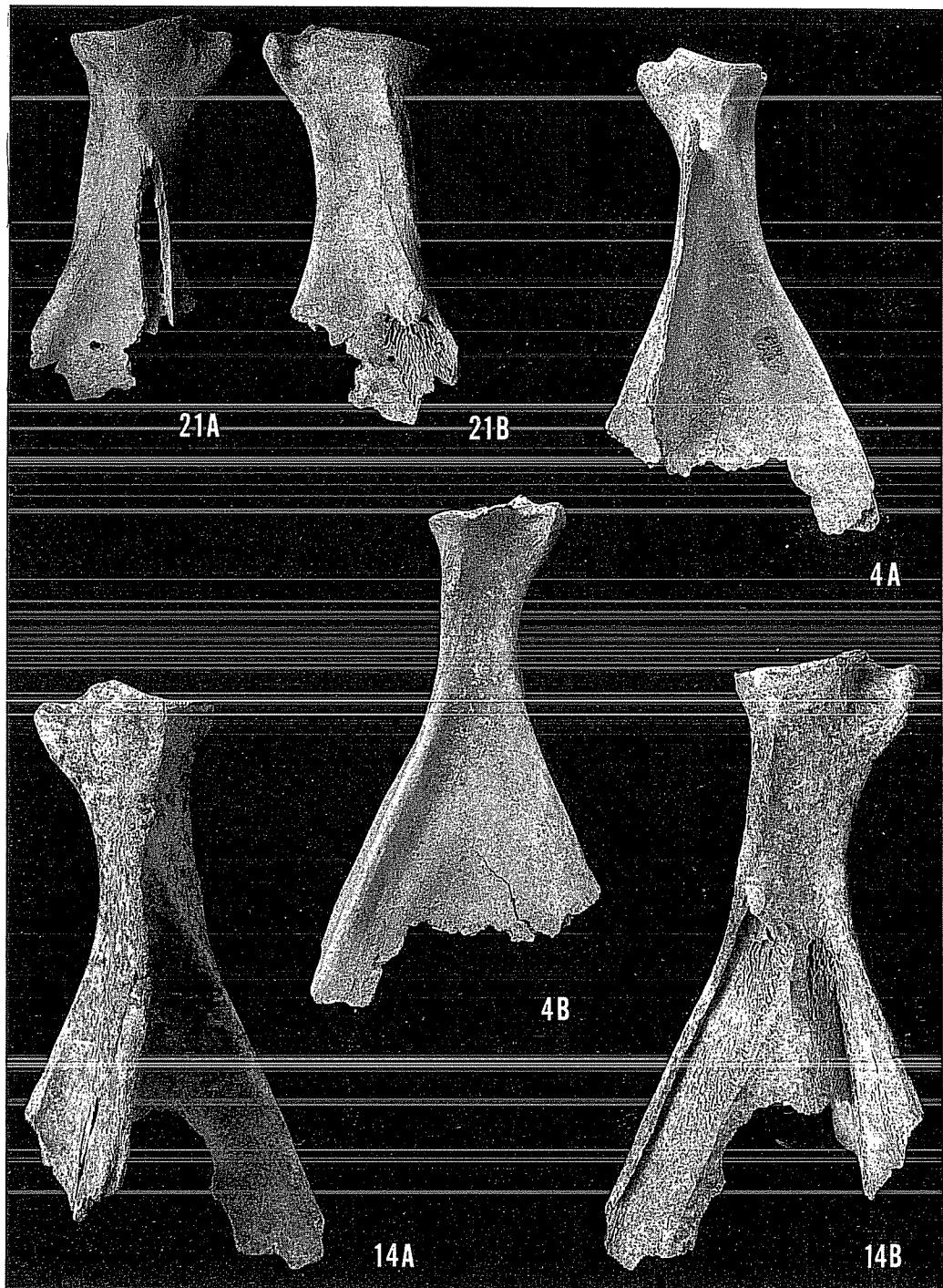


写真5 卜骨3

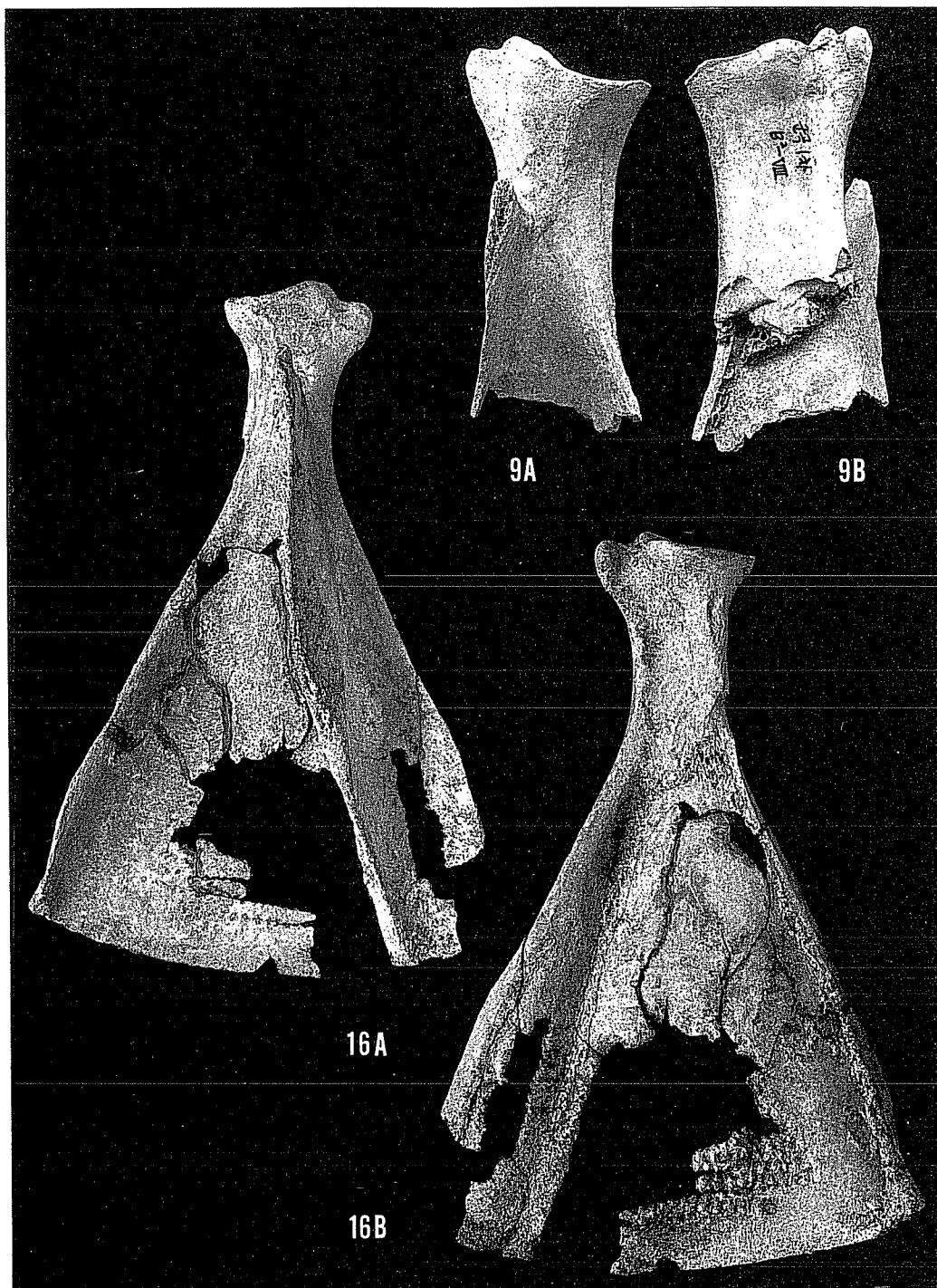


写真 6 卜骨 4

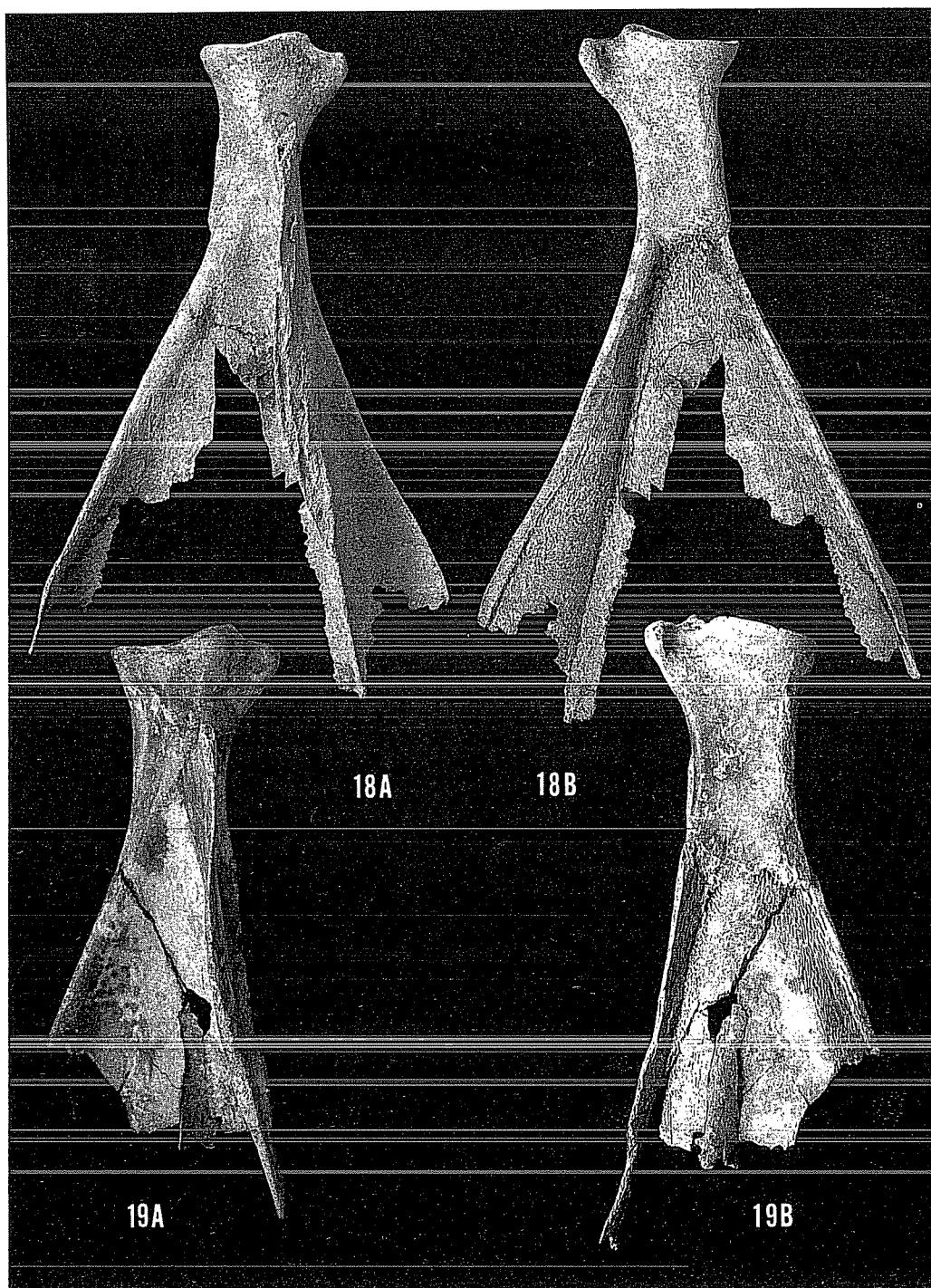


写真7 ト骨5

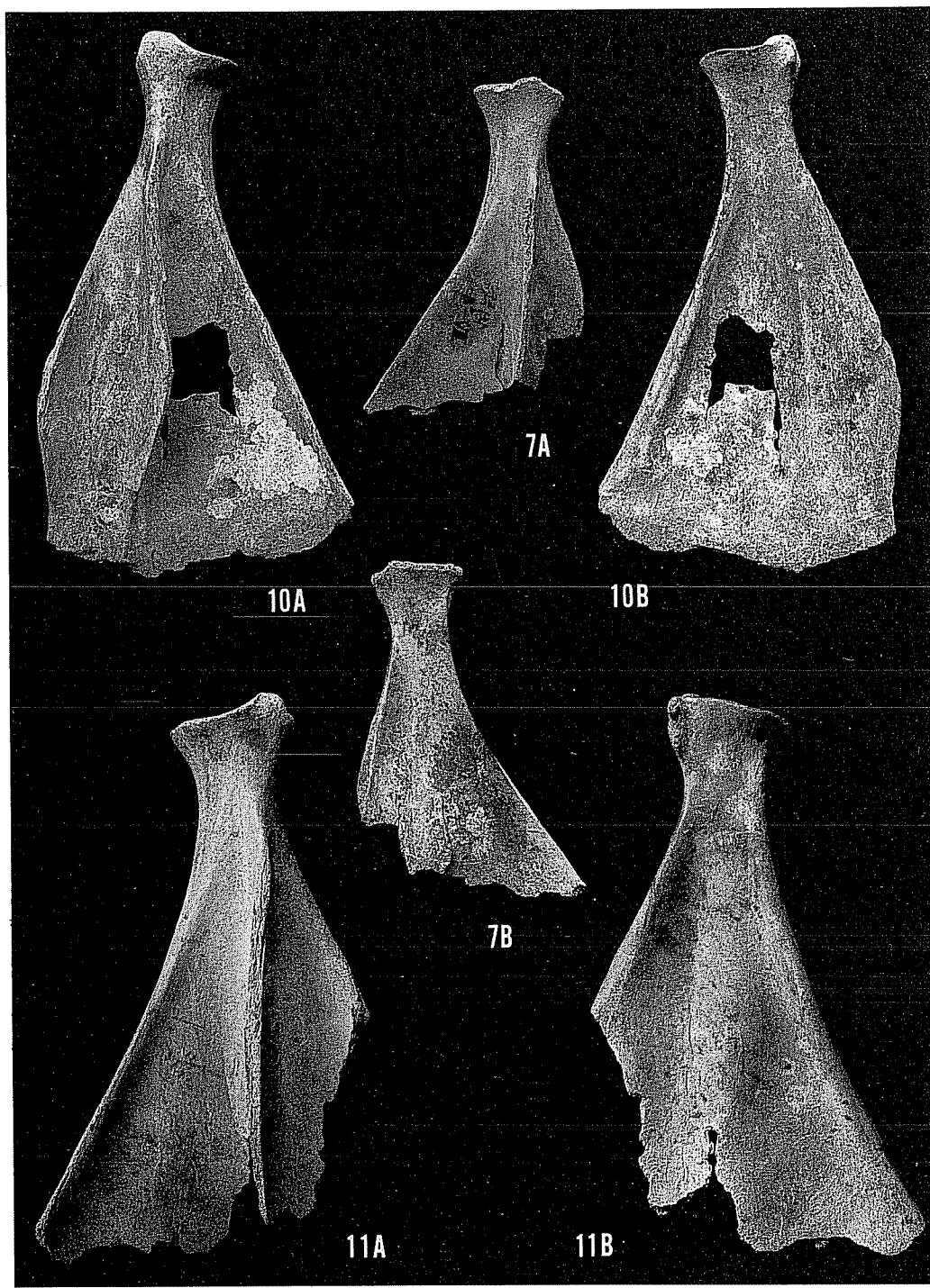


写真 8 卜骨 6

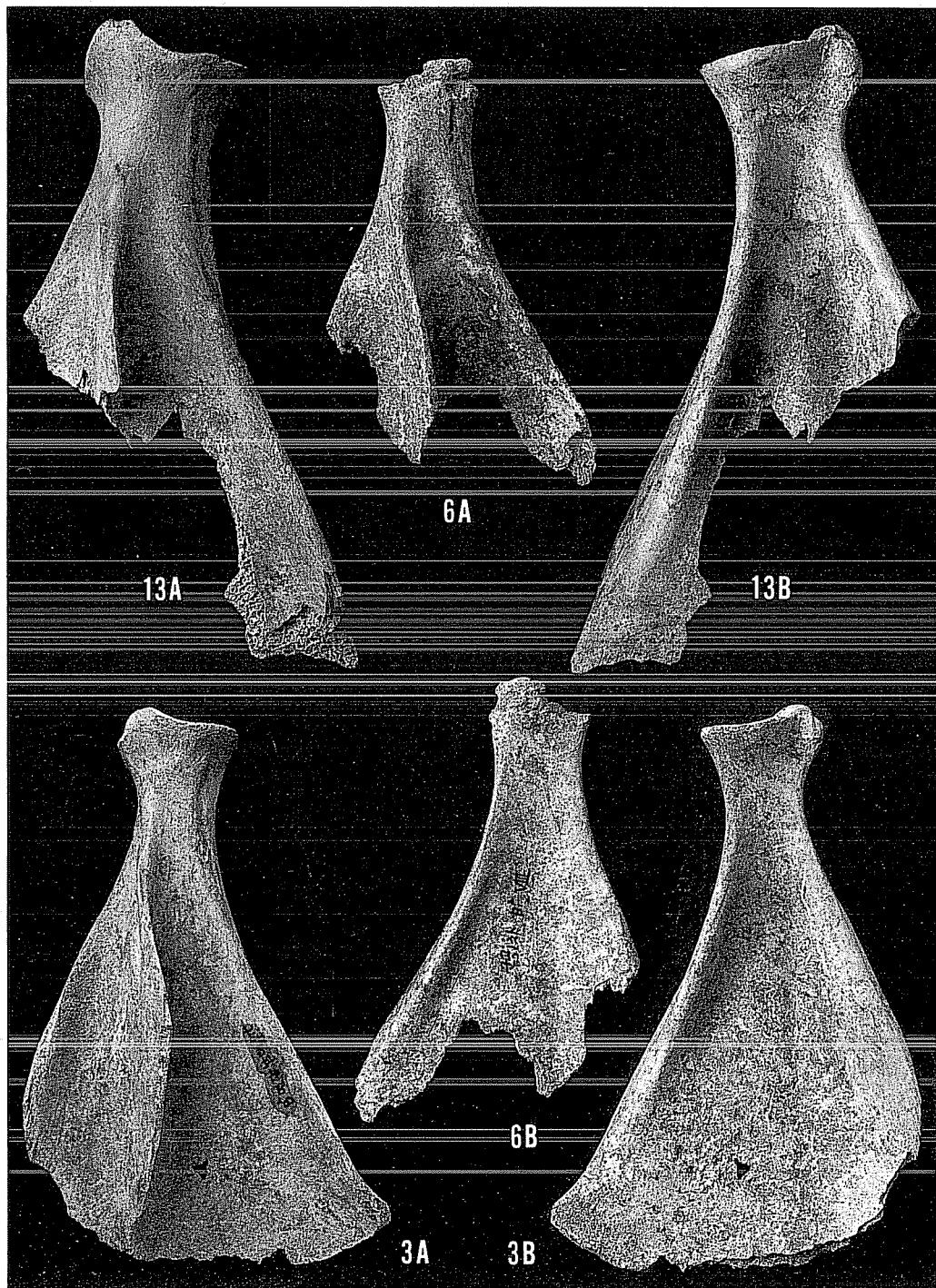


写真9 舟骨7

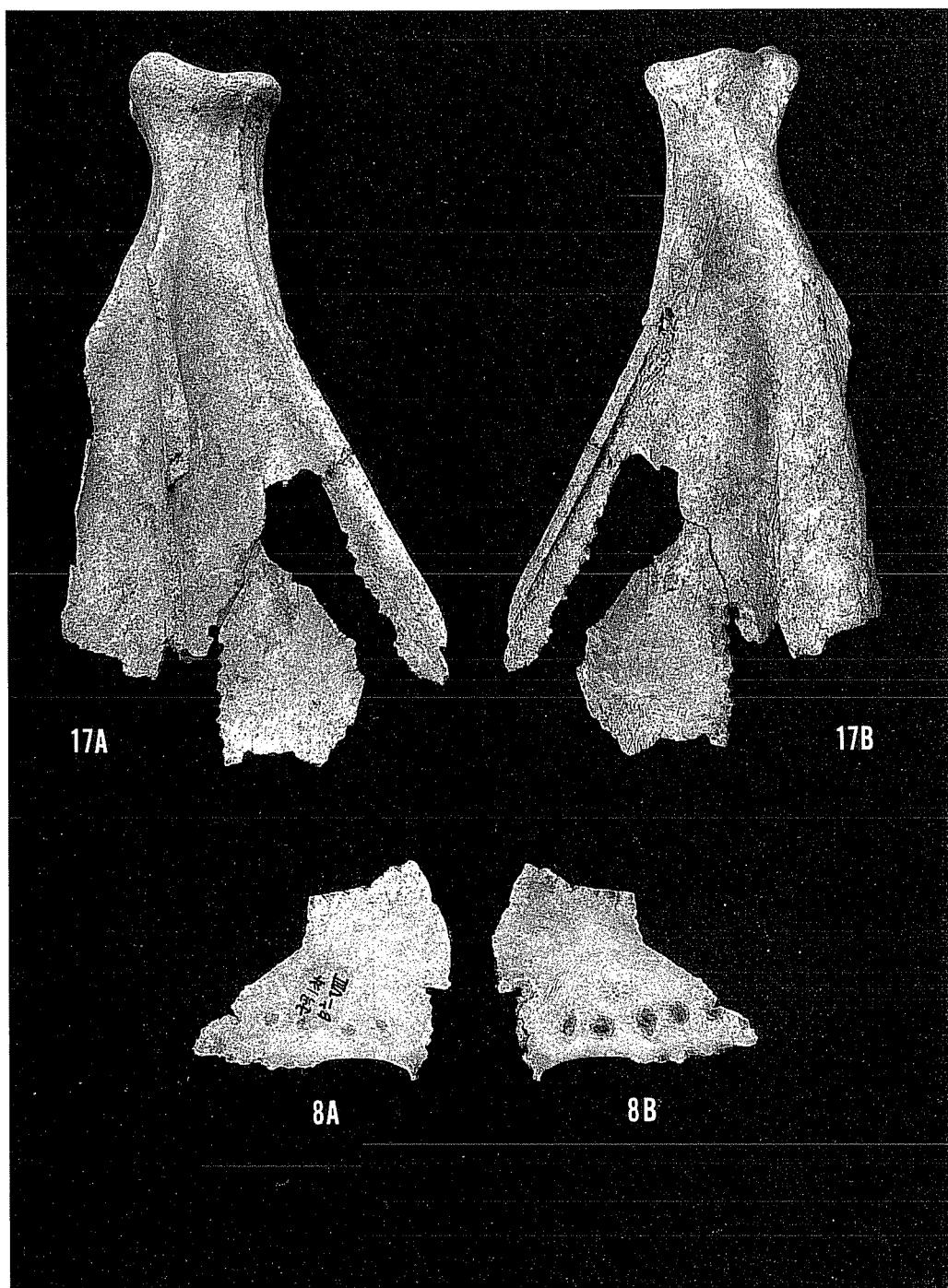


写真10 卜骨 8



写真11 灼痕の亀裂の方向（上：タテ，下：ヨコ。番号は第1・3表に同じ）

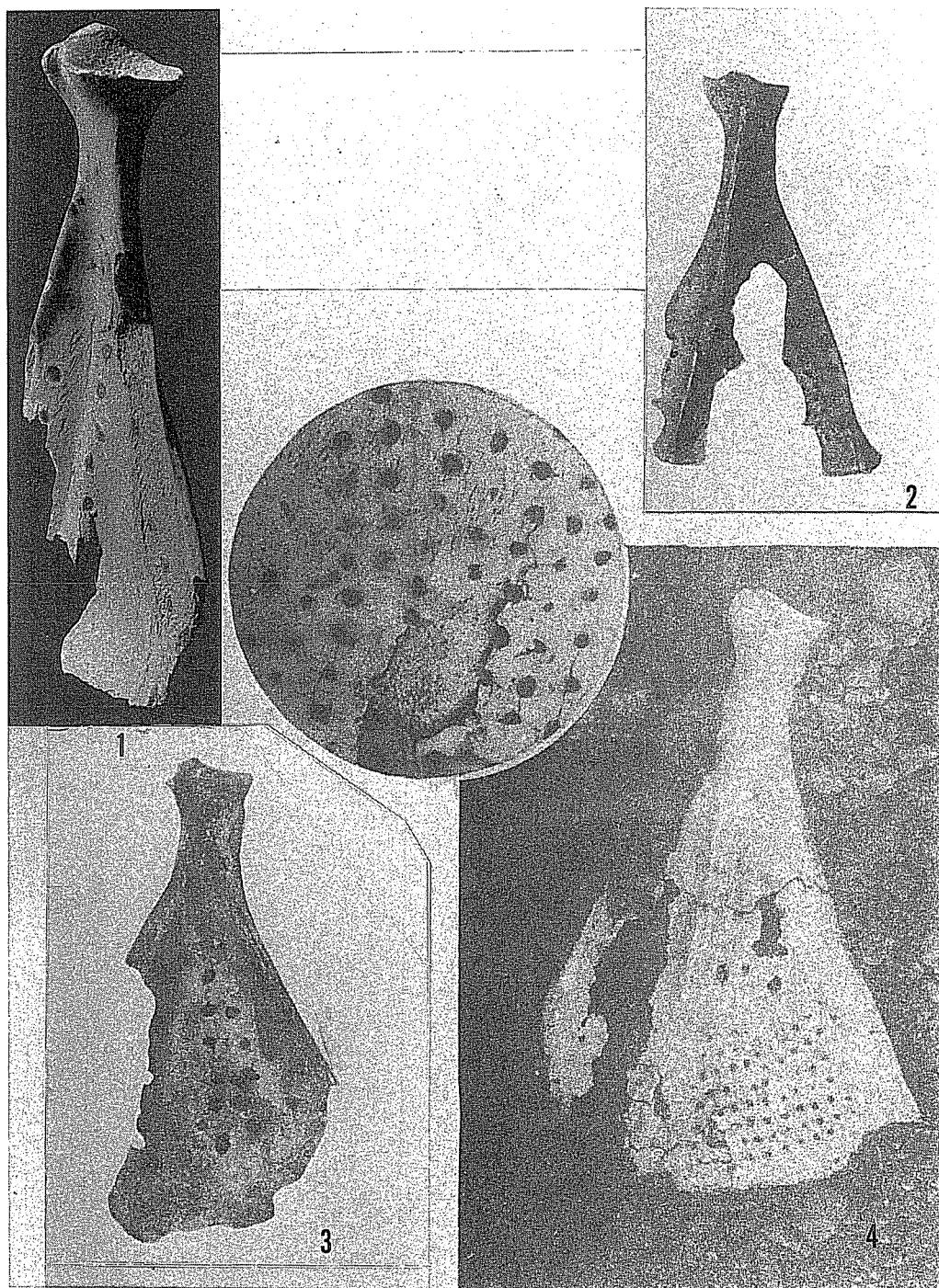


写真12 虎谷遺跡出土のト骨 (図鑑および報告書より引用)

